

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號六第 卷二十五第

月六年六十和昭

哀辭 故山本博士遺影及署名

## 論叢

支那の農家と田賦附加税……………經濟學博士 八木芳之助

佛印幣制論……………經濟學博士 松岡孝兒

企業者労働費論……………經濟學士 大塚一朗

貨幣流通期間と平均生産期間……………經濟學士 青山秀夫

## 時論

重慶政府の戦時物價政策……………十龜盛次

## 記事

山本博士逝く

追憶文

神戸 正雄 末廣 重雄 牧野 虎次 中瀬古六郎 本庄榮治郎

谷口 吉彦 松岡 孝兒 大塚 一朗 堀江 保藏 穂積 文雄

高木 眞助 蟻川 虎三 石川 興二 金持 一郎 岡本 清造

## 附錄

彙報

外國雜誌論題

本誌第五十二卷總目錄

## 山本博士の追憶

神戸 正雄

山本博士ほど眞面目な同僚は少い。博士は何時遇つても用件しか話し出されたことはなかつた。博士から冗談とか無駄口とかいふものを聞いたことはない。人は兎角他人の批評のしたいものだが、其も博士から聞いたことはない。

博士の眞面目な性格は恐らく其信仰から來たものであらう。博士は固い耶蘇教の信者であつた。單なる形だけの信者ではなく、實踐的な信者であつた。酒も煙草も用ひず、永く京都に住居して居ながら、祇園、新京極へ足踏みされたことはなかつたさうだ。

此眞面目な性格は其學問にも現はれて居る。博士の研究的態度は眞摯其ものであり、其著書論文にも其態度がよく現はれて居る。博士の眞面目な書き物は見た

ことがあるけれども、其隨筆風なものを發見することは出來ない。

博士の親孝行なことは有名である。博士は比較的結婚されたのが遅かつた。長い間、母君と御一緒に住つて居られたが、其は母君への心遣ひからであつたと聞いて居る。

博士は殖民政策の外に、工業政策を専攻せられ、社會政策にも關心を有つて居られたが、博士の思想問題に對する態度は始終一貫して排社會主義であつた。マルキストに對しては、正面から反對し、京都大學に於ける大正末期の學内思想動搖時代にも、博士は田島錦治博士と共に、敢然としてマルキスト運動を排撃された。此處にも博士の眞面目な性格が現はれて居る。其當時の情勢にては、今少しく寛容なる態度に出られたしとの感をもいだいたけれども、今にして思ふと、博士の態度の明確なりしことにむしろ敬意を表しなければならぬ。

私は博士には以上の點に於て敬服して居るけれど

も、多少、潔癖の嫌があり、清濁併呑を敢てし得られなかつたといふ恨みがあつた。博士には随つて政治家的素質を認めることは出来ぬ。即ち博士は眞剣な學者であり、純真なる教育者であつた。其處に博士の使命があり、又完全に之を果されたのである。